

円居挽のミステリ塾

円居挽

×

青崎有吾

斜線堂有紀

日向夏

相沢沙呼

麻耶雄嵩

自分のセンスを信じることをやめたミステリ作家・円居挽が、

新たなミステリの真髄

を見つけるための

「ミステリ塾」

開講!!

人気作家たちの「ミステリ道」を、円居さんと一緒に学ぼう!

青崎有吾 斜線堂有紀 日向夏 相沢沙呼 麻耶雄嵩

円居挽のミステリ塾

円居挽×青崎有吾＋斜線堂有紀＋日向夏＋相沢沙呼＋麻耶雄嵩

星海社

222



SEIKAISHA
SHINSHO

はじめに

「円居挽のミステリ塾」へようこそ！

本書は、ミステリ作家の円居挽さんをパーソナリティーとする連続対談企画「円居挽のミステリ塾」の全5回を収録したものです。

「円居挽のミステリ塾」とは、円居さんがミステリについて教える塾ではなく、円居さんと一緒にミステリについて学ぶ塾です。かつて自分のセンスを信じるのをやめたことで、デビューを果たしたという円居さん。京都大学推理小説研究会で叩きこまれた独自のミステリ観は、円居さんをデビューまで導いた創作の指針であるとともに、デビュー以後の創作を束縛する枷かせでもありました。より詳細に円居さんの作家スタンスについて知りたい方は、第0回からページをめくってください。

そんな円居さんと、自身は持っていない新たな武器としての「ミステリのおもしろさ」を学んでいこうという趣旨で、ゲストに作家の方をお招きして対談を開催してきました。

対談には、青崎有吾さん、斜線堂有紀さん、日向夏さん、相沢沙呼さん、麻耶雄嵩さん、以上の5名の方を各回にお迎えし、主に次のふたつについてインタビュウしています。

・どのような作品を読んできて作家デビューに至ったのか？

・どのように作品を執筆しているのか？

〈課題図書〉

- 第1回 青崎有吾さん『アンデッドガール・マードーフアルス』
- 第2回 斜線堂有紀さん『楽園とは探偵の不在なり』
- 第3回 日向夏さん『薬屋のひとりごと』
- 第4回 相沢沙呼さん『medium 霊媒探偵城塚翡翠』
- 第5回 麻耶雄嵩さん『メルカトルかく語りき』

読書やミステリにはまったきっかけや、作家デビューに至るまでの読書遍歴をお聞きするなかで、ゲスト作家の方から多くの作品をご紹介いただきました。どんな作品を読んで

ミステリ観を育み、作家を志したのか。たくさんの本との出逢いを記録したブックガイドとして、まず本書をお楽しみいただけると嬉しいですよ。

また、右に挙げた作品をどのように構想・執筆されたのか、同業者として気になる「ミステリのつくりかた」を、円居さんからネタバレ有りで聞き出していただきました（それぞれの課題図書を未読の方はご注意ください）。各々の作家スタンスと苦心が垣間見えるなかから、もしかすると、あなたのミステリ創作に役立つヒントが見つかるかもしれません。

大いに脱線しながらも、ミステリについて縦横無尽に語り合う姿から、作家それぞれの「ミステリ道」がきつとあなたにも見えてくるはず。

この『円居塾』に入塾して、あなたも己おのがミステリ道を極めましょう！

星海社編集部

目次

はじめに 3

円居挽のミステリ塾 第0回 9

円居挽のミステリ塾とは？

円居挽のミステリ塾 第1回 37

ゲスト
青崎有吾
(課題図書『アンデッドガール・マーダーファルス』)

円居挽のミステリ塾 第2回 103

ゲスト
斜線堂有紀
(課題図書『楽園とは探偵の不在なり』)

円居挽のミステリ塾 第3回 165

ゲスト

日向夏

(課題図書『薬屋のひとりごと』)

円居挽のミステリ塾 第4回 221

ゲスト

相沢沙呼

(課題図書『medium 霊媒探偵城塚翡翠』)

円居挽のミステリ塾 第5回 271

ゲスト

麻耶雄嵩

(課題図書『メルカトルかく語りき』)

※対談は、すべてツイキャスで音声配信したものです。

※注釈は、2022年5月現在の情報をもとに、星海社編集部が作成しました。

円居挽のミステリ塾とは？

円居挽のミステリ塾とは？

——ただいまから、「円居挽のミステリ塾」第0回を始めます。パーソナリティーと表現するとすごくラジオっぽいですね、お話しいただくのはミステリ作家の円居挽さんです。

円居 円居です。今日はミステリ作家として喋りにきました。

——進行は星海社の丸茂が担当させていただきます。本日は、こんな謎なぞのトークを聴きにお集まりいただきありがとうございます。当然「円居挽のミステリ塾ってなんですか？」という方がほとんどかと思うので、その第0回と称して企画内容を紹介させていただくのがこの配信です。「円居挽のミステリ塾」は、ゲスト作家の方をお招きして円居さんとミステリトークを繰り広げていただく連続対談企画です。6月から月1回ペースで開催していくつもりなのですが、どこまで続くのかは反響次第でしょうか……。

円居 ゲストは何名か決まっている方もいるんですけど、未定のところもあるんですよ。ですから、3回とかでおしまいになってしまう可能性も……そうならないように反響を見ながら調整するつもりですが、まずどんな話をするかを今回ばっちり紹介していきたいと思います。

——簡単にご説明すると、ゲストの方にどんなミステリを読んできたのかをご紹介します。いたり、円居さんにミステリ作家という立場からゲストの方の作品についてインタビュ―していただくというのが対談の趣旨です。「ミステリ作家としてどう作品を読んでいるのか？」というのを、円居さんからご紹介いただけますでしょうか。

円居 もちろんおもしろがりたいから読むっていうのが、本を読むいちばんの動機ではあります。一方で、世間でなにがおもしろがられているかを確認する作業として読んでるところがどうしてもあるんですよ。とくに作家デビューを意識してからは、僕にとって読書は「おもしろさ」の引き出しを増やす作業になりました。

——作家として小説を書くための読書になった、ということですよ。

円居 自分の内におもしろさを発見して、自分の引き出しとして獲得することが目的になったわけです。僕は自分の考えるおもしろさが信用できなくなった時期がありました。て、自分が信用できないから、世間がおもしろがっているものをひたすら集めたんです。デビューしてからも、そんな意識で本を読んでいます。それに、僕は同業者と「あの本どう思いましたか？」みたいな話をあんまりしないんですよ。きっとほかの作家さんもそうなんじゃないかな。読書会なんてデビューしたらやる機会ありませんし、お互いの小説観やミステリ観がぶつかってしまうかもと迂闊うかつに感想を口にできないこともあるんじゃないですか。でも本当はしていくべきだという気持ちもあるんです。

——この「円居挽のミステリ塾」は、そういう話をする場にしていききたいですね。

きっかけはヴァン・ダイン

——「円居挽のミステリ塾」では、ゲストの方に作家デビューに至るまで「どんな作品を読んできたのか?」、読書遍歴やデビューの経緯いきざつをインタビュウしていきます。今回は円居さんにインタビュウさせていただいて、「自分の考えるおもしろさが信用できなかった」という円居さんの作家スタンスに迫れたらと思っっています。まず、円居さんがミステリにハマったのはいつごろになりますか?

円居 小学生の低学年で岩波少年文庫版のホームズを祖父から渡されて、楽しく読んでいた記憶はありますが、その段階でミステリっ子になった感じではありませんでした。小

アーサー・コナン・ドイル(シャーロック・ホームズ)シリーズ イギリスの作家コナン・ドイルによるミステリ・冒険小説シリーズ。ロンドンのベーカー街221Bに住む私立探偵シャーロック・ホームズの活躍を、友人の助手役ジョン・H・ワトソンが記録する体裁で展開される。岩波少年文庫からは『シャーロック・ホームズの冒険』から7冊が刊行されている。

学校の図書室にあかね書房の〈少年少女世界推理文学全集〉という海外の名作ミステリが児童向けにリライトされたシリーズがあつて、4年生でそのヴァン・ダインを読んだんです。それがおもしろくて全20巻の残りもコンプリートしていったのが、ミステリにハマったきっかけですかね。

——本を手にする習慣があつたのは、ご家族の影響でしょうか。

円居 そうですね。祖父が読書家で、文学全集なんかがある家でした。全集を読むことはなかつたですけど、家に本があるだけで興味が向くんですよ。小学生らしくゲームも好きでしたが、小4から塾に通い始めたんです。そこでゲーム禁止になってしまった。でも本は許されたので、図書室の本を読んでいくことになりました。ちなみにヴァン・ダインを読んだのは、クラスメイトがわざわざ「おもしろい本があるんだぜ！」って勧めてくれたからでしたね。

——小4でヴァン・ダインを勧めてくるなんて、すごくリテラシーが高いクラスメイトで

すね。

円居 そうそう（笑）。ふつうの公立小学校だったんですけどね。ただそいつも受験組で、本読み仲間がほしかったのかもしれないと、いまになって思います。へ少年少女世界推理文学全集》を読みつくしたら、家にあつた〈あさみ みつひこ浅見光彦〉シリーズから内田康夫作品を、

〈少年少女世界推理文学全集〉 1963年にあかね書房から刊行開始した、子ども向けに抄訳された海外ミステリの翻訳シリーズ。全20巻で、ポオ『モルグ街の怪事件』、ドイル『シャーロック・ホームズの冒険』、ルブラン『アルセーヌ・ルパンの冒険』、チェスタトン『ふしぎな足音』、ディクソン・カー『魔女のかくれ家』、クリステイ『ABC怪事件』、クイーン『エジプト十字架の秘密』などの名作がラインナップに並んだ。

S・S・ヴァン・ダイン アメリカのミステリ作家。1939年没。英米本格ミステリの黄金時代とされる1920～1930年代に活躍した作家のひとり。著作に、探偵ファイロ・ヴァンスが心理学的推理で事件を解決する『グリーン家殺人事件』『僧正殺人事件』など。ミステリ執筆の規則として「探偵小説作法二十則」（通称ヴァン・ダインの二十則）を提唱したことで知られている。〈少年少女世界推理文学全集〉からは『エジプト王のろい』が刊行された。

内田康夫〈浅見光彦〉シリーズ 『後鳥羽伝説殺人事件』から始まる、フリーのルポライター・浅見光彦を探偵役とするミス터리シリーズ。全15作。独身貴族な永遠の33歳・浅見光彦が取材先で遭遇する日本各地の事件を、「軽井沢のセンセ」こと内田康夫が小説にしているという設定で展開され、軽井沢には内田康夫の直筆原稿や愛用品などを展示する浅見光彦記念館が設立されている。

内田康夫 ミステリ作家。2018年没。西村京太郎、山村美紗と並び、トラベル・ミステリー（旅情ミステリー）の書き手として知られている。著作に〈浅見光彦〉シリーズ、長野県警・竹村岩男を探偵役とする〈信濃のコロンボ〉シリーズ、警視庁捜査一課の岡部和雄を探偵役とする〈岡部警部〉シリーズなど。北区内田康夫ミステリー文学賞の創設にも寄与した。



〈三毛猫ホームズ〉から赤川次郎作品を読み進めました。もちろん内容をちゃんと理解していたかは怪しいですが、それでもあの辺りのレジエントな方々の読みやすさについていいですね。キャラクターに着目して、〈三毛猫ホームズ〉だったらホームズを、〈浅見光彦〉シリーズなら浅見光彦の活躍にフォーカスして読んでいければストーリーは小学生でも追える。「売れてる作家がおもしろいのは当たり前だな」なんていうことも当時うつすら思っていました(笑)。

——早熟ですね(笑)。

円居　そこからさらにSFに出会います。教科書で星新一先生のショート・ショートに出会って、新潮文庫の星新一作品を読み進めました。その過程で小松左京先生、筒井康隆先生に出会うわけです。小6の読書はほとんど筒井先生にとっぷりでしたね。

京大ミス研との遭遇

円居 中学に入るとゲーム禁止から自由になりましたが、読書はふつうに続けていました。

ただ本を読み進める指針がなくて、そのとき出会ったものを無闇に掘るしかないという

赤川次郎〈三毛猫ホームズ〉シリーズ『三毛猫ホームズの推理』から始まる、探偵役の三毛猫のホームズが飼い主の片山刑事たちにヒントを与えて事件を解決させるミステリシリーズ。既刊54作。

赤川次郎 ミステリ作家。殺人などの刑事事件も扱うけれど読み味は軽快なユーモア・ミステリーの書き手として知られている。著作に〈三毛猫ホームズ〉シリーズ、弱小暴力団の四代目を継いでしまった女子高生・星泉が闇社会の抗争に巻き込まれる『セーラー服と機関銃』、一般家庭・佐々本家の三人姉妹を探偵役とするミステリ『三姉妹探偵団』シリーズなど。

星新一 SF作家。1997年没。1001編ものショートショートを手がけ、「ショートショートの神様」と呼ばれている。小松左京、筒井康隆と並び「SF御三家」とも評された。著作にショートショート集『ポッコちゃん』『エヌ氏の遊園地』など。その作家歴は最相葉月による評伝『星新一—100—話をつくった人』に詳しい。

小松左京 SF作家。2011年没。日本未来学会の前身「万国博を考える会」のメンバーとして1970年の大阪万博に携わるなど、作家活動に留まらない領域で活躍した。著作に、大規模な地殻変動が予測された日本列島の運命を描く『日本沈没』、ウィルス・パンデミックを皮切りに人類滅亡の危機を描く『復活の日』、無限に砂が落ち続ける砂時計の発見から10億年の時空を超えての闘いとロマンスを描く『果しなき流れの果に』など。

筒井康隆 小説家。日本SF第一世代に属したのち中間小説に進出、SF・エンタメ・純文学のフィールドをメインに領域横断的で多彩な執筆活動を展開している。著作に青春ジュブナイルSF『時をかける少女』、テレビスの火田七瀬を主人公とする〈七瀬〉シリーズ、言語実験的な叙述を駆使し発狂した文房具たちの宇宙戦争を描くSF『虚構船団』、ライトノベル『ピアンカ・オーバースタディ』など。その作品歴は佐々木敦によるガイド『筒井康隆入門』に詳しい。



問題に突き当たっていたんです。『スレイヤーズ』のアニメが放送されていたけど自宅のテレビでは映らなくて、せめて原作のライトノベルを読みたいという気分はあったんですが、ライトノベルを読むクラスメイトが見当たらなかった。そんな中1の終わりにクラスメイトが勧めてきたのが、**森博嗣**先生の『すべてがFになる』でした。

—— おお、講談社ノベルス版ですよ。

円居 ですね。おもしろかったと返したら、彼が持っていた森先生の作品をぜんぶ貸してくれて。それも読みきってしまうと、**京極夏彦**先生の『**姑獲鳥の夏**』を貸してくれた。ぶ厚いのを見ると燃えるじゃないですか(笑)。そして京極先生の既刊も読み切ってしまったところで、「これはわかってくれる人がいなかった」と彼が貸してくれたのが**麻耶雄嵩**先生の『**夏と冬の奏鳴曲**』だったんですよ。

—— 講談社ノベルスを遡さかのぼって、ついに京都大学推理小説研究会(京大ミス研)とのファースト・コンタクトですね。おもしろく読めましたか？

神坂一『スレイヤーズ』魔法や魔族が存在する世界を舞台に、美少女天才魔道士・リナインバースとその相棒となる剣士・ガウリイたちの旅路を描くファンタジーライトノベルシリーズ。イラストはあらいずみるいが担当。1995年からテレビアニメ第1期が放送された。

森博嗣 ミステリ作家。著作に、『すべてがFになる』から始まるN大助教授・犀川創平を探偵役とするミステリ(S&M)シリーズ、『黒猫の三角』から始まる元旧家の令嬢・瀬在丸紅子を探偵役とするミステリ(V)シリーズ、押井守監督によりアニメ映画化されたSF空戦戦記(スカイ・クロラ)シリーズなど。

森博嗣『すべてがFになる』天才プログラマー・真賀田四季の牙城である孤島の研究所で発生した密室殺人の解決に、N大助教授・犀川創平とその学生・西之園萌絵が挑むミステリ。第1回メフィスト賞を受賞した森博嗣のデビュー作であり、(S&M)シリーズ第1作。

京極夏彦 小説家、妖怪研究者。著作に、戦後日本を舞台に妖怪の仕業と見紛う怪事件を拝み屋・京極堂が解決するミステリ(百鬼夜行)シリーズ、江戸時代末期前後を舞台に公には裁けない事件を妖怪の仕業として処理する願人坊主姿の小悪党・又市たちの暗躍を記録した妖怪時代小説(巷説百物語)シリーズなど。グラフィックデザイナーでもあり、星海社FICITION電子書籍専用フォント「フミテ(筆)」の開発アドバイザー・命名者を務めた。

京極夏彦『姑獲鳥の夏』二十箇月もの間子供を身籠っているという久遠寺産科医院の娘と、密室から失踪を遂げたその夫……三文文士・関口巽が遭遇した謎の「憑き物落とし」に拝み屋・京極堂こと中禅寺秋彦が挑むミステリ。京極夏彦のデビュー作であり、本作の原稿が講談社文芸図書第三出版部に突然持ち込まれたことが、のちにメフィスト賞として体制化される文芸誌『メフィスト』での原稿募集のきっかけとなった。(百鬼夜行)シリーズ第1作。

麻耶雄嵩 ミステリ作家。第0回の時点では、第5回のゲストになることは未定でした。

麻耶雄嵩『夏と冬の奏鳴曲』孤島を舞台に「足跡のない」雪密室での殺人が発生する……としか紹介できない、麻耶雄嵩初読者にはオスメし難い、本格ミステリ界屈指の問題作。『新本格ミステリはどのようにして生まれてきたのか?』編集者宇山日出臣追悼文集「収録の二階堂黎人の寄稿によると、本作のほか二階堂黎人『聖アウストラ修道院の惨劇』、竹本健治『ウロボロスの偽書』、井上雅彦『竹馬男の犯罪』、黒崎緑『柩の花嫁』の5作品が(スーパーミステリ・ビッグ5!)と銘打たれ1993年8月に同時発売されたことが、講談社ノベルスのひと月での刊行作品がすべて(新本格)作品となった初めての機会だった。

京都大学推理小説研究会 京都大学の文芸サークル。綾辻行人、我孫子武丸、法月綸太郎、小野不由美、麻耶雄嵩など、多数のミステリ作家を輩出したミス研として知られている。



円居 ぜんぜん！ だってあの『夏と冬の奏鳴曲』ですよ！ 「わからないような、わかるような……いややっぱりわからんわ！」 って読破しまして、「おもしろかった気がするけどようわからなかった……」と返しました。そしたら『翼ある闇』を貸してくれて、これはふつうに読めるしおもしろかった。なんでそっちを先に貸してくれなかったんだよと（笑）。そして、綾辻行人先生、我孫子武丸先生、法月綸太郎先生たち、京大ミス研出身の作家を追いかけることになりました。

——いわゆる新本格第一世代の方々ですね。

円居 講談社ノベルスは家の本棚にもそれなりに並んでいて、綾辻さんの〈館〉シリーズが『迷路館の殺人』まであることに気づいたりしました。



ライトノベル作家志望だった？

円居 メフィスト賞作家を読み進めるなかで清涼院流水先生の『コスミック』に衝撃を受けたんですが、そのことは「好書好日」のエッセイで詳しく書いたので割愛しますね。メフィスト賞作品をシリーズの最新作まであらかた読み尽くしてしまい、中3くらいからようやく本格的にライトノベルに突入します。『魔術士オーフェン』あたりの人気作を

綾辻行人〈館〉シリーズ 探偵・島田潔が異端の建築家・中村青司の設計した館で発生する事件の解決に挑む、館ものミステリシリーズ。第1作『十角館の殺人』は、のちに〈新本格〉と呼ばれる本格ミステリ流行の嚆矢とされる綾辻行人のデビュー作であり、第2作『水車館の殺人』の帯に「新本格推理（ネオ・クラシック）」の惹句が載ったことが〈新本格〉の呼び名が生まれた契機とされる。

清涼院流水『コスミック世紀末探偵神話』「今年、12000個の密室で12000人が殺される。誰にも止めることはできない」と予告した「密室卿」の犯行に、名探偵・九十九九十九たち特殊な推理能力を持つJDC (Japan Detectives Club) 日本探偵倶楽部)の面々が挑むミステリ。第2回メフィスト賞を受賞した清涼院流水のデビュー作であり、〈JDC〉シリーズ第1作。

「好書好日」のエッセイ「円居挽さんを大学のミステリ研へと誘った清涼院流水「コスミック」「なんでもアリ」という希望と複雑な思ふ」と <https://book.asahi.com/article/12632831>

秋田禎信『魔術士オーフェンはぐれ旅』かつてドラゴン種族が棲息したキエサルヒマ大陸を舞台に、黒魔術士・オーフェンの旅路を描くファンタジーライトノベルシリーズ。イラストは草河遊也が担当。1998年からアニメ第1期が放送された。



読んでから、角川スニーカー文庫や富士見ファンタジア文庫や電撃文庫の新人作家を順番に読んでいく感じでした。そのころには本はお小遣いで買って読んでいて、作家になりたい気持ちもありました。ライトノベルレーベルからデビューしようと思って、その参考になるかなとライトノベルのレーベル雑誌をよく買って読んでましたね。『電撃hp』に『イリヤの空、UFOの夏』や『ブギーポップ』シリーズの短編が載っていたころです。

——ミステリでなくて、ライトノベル作家としてデビューを狙っていたんですね。

円居 小賢しいですが、ライトノベルの新人賞からミステリでデビューしようと考えてましたね。メフィスト賞ってキャラクター小説的な回路もあるじゃないですか。そんな自分の感覚とあっていた、富士見ミステリー文庫とスニーカー文庫のヘスニーカー・ミステリ倶楽部〈が あったんですよ。〉

——米澤穂信さんの〈古典部〉シリーズが最初に刊行されたのがヘスニーカー・ミステリ

倶楽部」ですよ。

円居 『氷菓』はもちろん読んでいて、ライトノベルレーベルがミステリをやるうとしていく流れを感じていました。

——SF作家になる可能性はなかったんですか？

円居 ミステリかSFかと選択するなら、ミステリを選ぶくらいには愛着がありました。

秋山瑞人『イリヤの空、UFOの夏』 中学生・浅羽直之と手首に銀色の玉を持つ少女・伊里野加奈の、UFOの噂をめぐる一夏のボーイ・ミーツ・ガールを描いた青春SFライトノベルシリーズ。イラストは駒都えーじが担当。セカイ系の代表作のひとつとされるが、この〈セカイ系〉という用語は使用者によりニュアンスに差異があるため、前島賢『セカイ系とは何か』や東浩紀『セカイからもっと近くに』などを参照されたい。

上遠野浩平〈ブギーポップ〉シリーズ 「その人が一番美しい時に、それ以上醜くなる前に殺す」とされる都市伝説・ブギーポップ、世界を操る組織・統和機構の合成人間たち、超常の能力を覚醒する少年少女、そして『世界の敵』……日常の裏側にある世界の対決を描く、現代ファンタジーライトノベルシリーズ。

米澤穂信〈古典部〉シリーズ 省エネ主義の高校生・折木奉太郎を探偵役とする〈日常の謎〉ミステリシリーズ。2012年から、第1作『氷菓』のタイトルで京都アニメーションによるテレビアニメが放送された。第2作『愚者のエンドロール』までは、角川スニーカー文庫のレーベル内レーベル〈スニーカー・ミステリ倶楽部〉から刊行されていた。



た。小学生のころにはSF作家になりたい気持ちもあったんですけどね。これは正しい史観ではなく、あくまで当時の自分に見えていた景色が……という話ですが、SFっていわゆる冬の時代を迎えていると思っていたんです。一方でミステリやライトノベルは食える人は食べていそうだった。子ども心に業界というか、ジャンルの活況を感じ取っていた範囲で、比較的勢いがあるフィールドを狙ったわけです。

——打算的な小学生ですね（笑）。たしかにメフィスト賞が設立されてまもない時期ですよ。ライトノベルもレーベルや作品数が増えています。

円居 ある作家さんの見解ですが、2000年ぐらいまでのメフィスト賞はひとやま当てやろうという作家志望者が原稿を送っていた時代だったようです。ミステリプロパーでなくとも、当たると金になるからといろんな才能が集まっていたと（笑）。僕もそのなかに加わりたいと思って『メフィスト』本誌の座談会を読んできましたからね。というのが、無邪気に作家になりたいと思っていたころでしょうか。

——高校生になっても、その延長で本を読まれていたという感じでしょうか。

円居 高校生になったら投稿を始めました。富士見と電撃には2、3回くらい応募したんですけど、はしにも棒にもかかりませんでしたね。

——どんなものを書かれたんです？

円居 うろ覚えですけど、ファンタジーとか伝奇っぽい感じにミステリ要素が入った……でも、まあおもしろくないんで！ 掘り下げないでおきましょう！

『メフィスト』 講談社文芸第三出版部が発行している文芸誌。『小説現代』臨時増刊号の誌名に、1994年4月増刊号から「メフィスト」の文字が加わったことが実質的な創刊とされる。1995年8月号から編集部が原稿募集・投稿作品評価を語る座談会が掲載され、1996年に小説新人賞・メフィスト賞として体制化された。2021年からは、会員制読書クラブ「メフィストリーダーズクラブ」の会員限定小説誌として発行されている。

憧れの登竜門に入会するも……

——そして京都大学に進学して、推理小説研究会に入られたわけですよね。

円居 京大ミス研に入りたいたいから、京大に入ったと言ったほうが正しいですかね(笑)。インカレサークルなんで無理して京大に入る必要はないんですけど、当時はネットとも無縁で詳しい情報を知らなかったのです。作家になれるコースとは言わないまでも、そこを勝ち抜けば世に出られるような作家登竜門的な空間が京大にあると思いきんでいたんです。作家になるために京大に入ったわけで……つまりバカだったということですよ。

——ミステリ作家登竜門みたいなイメージは、未だにあるんじゃないですか。京大ミス研って具体的にどんなことをしている場所だったんでしょう？

円居 課題図書を読んで読書会をする、ふつうの文芸サークルです。独特なのはへ犯人当

て、が定期的にあるところですかね。ただ、ここでの経験は大きかった。それまでは、読書仲間での会話って「あの作品よかったよね」みたいなふわっとした感じでした。ところがサークルに入ると「あの作品はここが悪かった」という話が増え、そこで感想の言語化の重要性を認識させられました。つまり、なんでもおもしろかったか、つまらなかつたのかを詳細に言語化できないとバカにされるわけです。僕は流水ファンとして入ったわけですが、「なにがおもしろいと思ってるの？」と問われて、「なんとなく……」と答えるとバカにされる。そして「つまらない」と評価する先輩の言語化には、いちいち納得感があるんですよ。「すべておっしゃる通りです」と……そこで自分のセンスを信じることをやめたんですよ。投稿もいい手応えがなかったもので、自分の創作に疑いを持つたんです。これは誤解していただきたくないんですけど、人間なにか好きだっていんですよ。そんなの当たり前です。ただ創作で食っていこうと思ったときに、僕は「なにをおもしろいと思ってるのか」を認識していきついでに思いました。だからこそ自分の好き嫌いをはっきり言語化して、創作に生かさなければいけないと。

——感覚的にもおもしろかった、つまらなかつたと思うだけでは、作家デビューには繋つながら

ないと考えたということですね。

円居 もちろん、感覚的に書いてデビューする人もいると思います。ただ自分はそんな才能はなかった。厳しい先輩に「じゃあ、なにがおもしろいんですか？」って聞くと、ちゃんと作品を挙げてそのおもしろさを他人が共有できるように説明してくれるわけです。感覚的に共感できなかつたとしても、言語化されれば少なくとも理解はできる。そこで、たとえばそれまで読むことがなかった山田風太郎やまだ ふうたろうや船戸与一ふなと よいちのおもしろさを知ることにもなりました。新しいおもしろさのものさしを提示され、自分のなかにはものさしがないと気づき、いろんな人の好きな本を読み漁ったのが、自分のセンスを信じることをやめてからの読書でした。

——周りにも作家志望であることは隠されていたんですって。

円居 入学したてのころは、作家志望だと軽い気持ちで口にしていました。ただ『蒼そう鴉城あじょう』というサークルの会誌に載せるための長編原稿にボツを食らったんですね。

——ボツ!? サークル活動で!?

円居 でも、あれはボツになって仕方ない出来でした。それで作家志望とは口にしなくなつたので、デビューしたら「おまえ、書いていたのか」と驚かれましたね。

山田風太郎 小説家。2001年没。古典伝奇文学に通曉し、伝奇・ミステリ・SF・時代小説などのジャンルにまたがる独創的な作品を手がけた戦後日本を代表する大衆小説作家として知られている。著作に、せがわまさきによる漫画『バジリスク』の原作『甲賀忍法帖』を始めとする異能を操る忍者や剣士たちの伝奇活劇（忍法帖）シリーズ、忍法により江戸幕府を転覆すべく冥界から召喚された剣豪たちと柳生十兵衛の闘いを描く『魔界転生』、帝都東京で役人の汚職を追及する太政官弾正台の大巡察・香月経四郎がフランス人巫女の口寄せをヒントに事件解決に挑む時代浪漫×本格ミステリ『明治断頭台』など。

船戸与一 冒険小説、ハードボイルド作家。2015年没。海外を舞台に非合法な生業を持つ日本人が登場する作品を多く手がけた。著作に、二つのファミリィが対立するブラジルの片田舎で発生した許されざる駆け落ちを追跡する（山猫）の異名を持つ謎の日本人が繰り広げる流血の抗争と、彼に会った男の成長を描くピカレスク『山猫の夏』、イスラム革命後の腐敗が進むイランを舞台に、革命防衛隊、独立国家樹立を悲願するクルド人ゲリラ、彼らに武器提供を試みる日本人の武器商人ハジラの各々の正義を賭けた闘争を描く『砂のクロニクル』など。

珍しいデビュー経緯

円居 1回生のときに歴史の闇の葬^{ほうむ}られた某賞に応募したんですけど結果は出ず、そこから次回作を用意するまでに時間がかかりました。書いたら確実に受賞できると思えるネタが見つかるまで、書きたくなかったです。長編一本を支えるだけのネタが思いつかなかったのでもフェイスト賞から逃げ回っていたんですけど、『ファウスト』が創刊されたんですよ。ファウスト賞という名前で中編くらいのボリュームの募集が始まって、そこに送るつもりで作品を用意していたんです。けれど『パンドラ』という後継的な雑誌が創刊されて、ファウスト賞は流れてしまった……これは御社の社長の太田さんが悪いです。なので、用意していた中編を第1話にしたゆるい長編にして『パンドラ』の流水大賞に送ったんです。それを送ったら編集の方から連絡がありました。後半はよくなかったけど、最初の話はよかったから、それをリライトして作品にしませんかと。6回生の秋のことでしたね。まあ、実際は3回生と4回生のころにも電撃大賞には2回ほど送って一次落ちしていたので、僕なりに必死だったんだと思います。

——円居さんは『パンドラ』の〈下克上ボックス〉という企画で誌上デビューしたんですよね。

円居 流水大賞には、投稿者に担当編集者がつく「あしたの賞」という……これは『あしたのジョー』にちなんだ太田さんのなんともいえないネーミングでしょうけど……梓があつたんですよ。僕の担当はとくに面倒を見てくれたんです。新人ですらないデビュー前のただの投稿者に定期的に連絡をくれて、原稿に意見をくれて、そのおかげでデビューできたと思ってます。初めて自分の作品にプラスの評価をくれたということもすごく嬉しいことで、ひらめきが生まれ『丸太町ルヴオワール』の第1章ができあがりました。

『ファウスト』 講談社の創業100周年(2009年)記念企画の一環として創刊された文芸誌。当時・講談社の編集者だった太田克史のひとり編集体制で発行されていた。

『パンドラ』 講談社BOX編集部が発行していた文芸誌。講談社BOXは「小説部門」「イラスト部門」「批評・ノンフィクション部門」の新人賞として流水大賞を運営しており、デビューとなる大賞と優秀賞のほか、デビューは約束されないが担当編集者がつく「あしたの賞」が設定されていた。『パンドラ』では「あしたの賞」の受賞者による競作企画〈下克上ボックス〉が実施され、そこで掲載された「盗人待ルノワール」が円居さんの誌上デビュー作になります。

——『パンドラ』に掲載したものは別に、『丸太町ルヴォワール』の執筆を進めていたんですか？

円居 そうですね、下克上ボックスっていう企画をやるから書かないかと言われて『パンドラ』に掲載された短編をひねり出しました。あれはあんまり評判がよくなかったんですけど。2作目のほうは評価が高かったです。『パンドラ』で誌上デビューしたのは7回生のところで、さすがに7年目の学費は払わないと親から怒られていたんですけど、『パンドラ』での原稿料で前期の学費がまかなえたんです。自分の腕で自分の学費を払ったという実感はいいものでしたね。

——投稿作でデビューする形ではない、珍しいデビューの仕方ですよね。

円居 だから僕は、賞でデビューすることに未だに憧れがありますね。独力であるレベルへ達した証だと思うので。ただ担当編集者と、その編集部のトップが認めてくれれば本は刊行されるんですよ。担当編集者の顔を見ながら書けばよくなって、そういうわかりや

すいゴールがない新人賞は自分には向いていなかったと後になって思いますね。たまたまい担当編集者と出会えた自分はすごくラッキーでした。

ミス研の呪縛から解放されるために

——京大ミス研で大きな意識の変化を余儀なくされた読書のスタンスは、円居さんのなかでいまでも続いているという感じでしょうか。

円居 そうですね……ただ悪い影響もあつたと思うんです。ミス研に入ったがために、ミス研の人たちが納得するものを書けないとデビューできないと思ひ込んでしまつたんですよね。

円居挽『丸太町ルヴォール』 古より京都で行われてきた私的裁判・双龍会に召喚された大学生・城坂論語が、その答弁で自身に嫌疑がかけられた祖父殺しの真相と事件現場で遭遇した真犯人・ルージュの正体を詳らかにしていく、疑似法廷×多重解決ミステリ。円居さんの単行本デビュー作で、同作から始まる『ルヴォール』シリーズは第4作まで刊行されています。



——指針になったけれど、抑圧にもなってしまったかもしれないと。

円居 いま冷静になって思うと、ミス研の感性に沿わなくてもデビューできるし、売れる作品はあるわけです。ただ未だにその呪いは残っていて、意識的に外さないといけないと思っています。どうしてもその枷かせを気にしすぎると、小さくまとまってしまう予感がある。セオリー全無視は論外としても、おもしろさを優先してあえて無視していいこともあるはずなんです。

——それが、デビュー以後の課題ということですね。

円居 もちろん自分の感性のままに書ける方もいると思います。ただ自分の場合は、セオリーを完全に無視すると、迷走してもとに戻ってこれなくなる予感もあるんです。セオリーを学んだうえで外していくのが自分には合っていて、ただもうちょっとそのことにはやく気づきたかったです。10年くらいはやく！

——とくに本格ミステリはセオリーが強いジャンルですしね。多かれ少なかれ、いまの作家さんは同じ課題を抱えて執筆されているのではないのでしょうか。

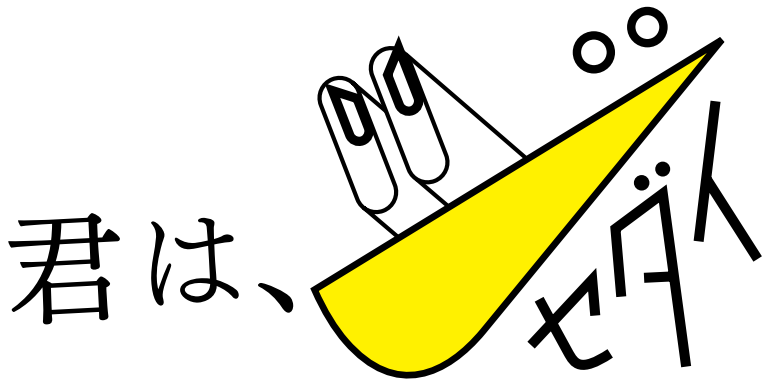
円居 ミステリ作家には、ミス研である程度セオリーを学び自分の創作を見つけていく、僕みたいなミステリプロパータイプもいますけど、非プロパータイプの方もいますよね。あの自由さが羨ましくうらやくて、どうすればいいところどりできるかなと、最近よく考えています（笑）。

——これからそんな円居さんの問題意識と一緒に、ミステリについて話していくことになると思います。次回からの対談にご期待ください。

（2021年5月21日、ツイキャスにて配信）

田居さんの振り返りコメント

記念すべき第0回。この頃はこの手のイベントの経験値がまだ足らず「本当に成立するのか？」という気持ちで一杯だったんですが、丸茂さんの進行がよかったのでどうにか形になりましたね。投稿歴のところで太田さんの名前が何度も出てますが、某賞とファウスト賞をぶん投げた件についてはちくちく言っていこうかなと（まあ、もっと早い内にデビューしたかったのは事実ですけど、今はこの形でデビューできて良かったと思っています）。



君は、

ジセダイ

何と闘うか？

<https://ji-sedai.jp>

「ジセダイ」は、20代以下の若者に向けた、**行動機会提案サイト**です。読む→考える→行動する。このサイクルを、困難な時代にあっても前向きに自分の人生を切り開いていこうとする次世代の人間に向けて提供し続けます。

メインコンテンツ
ジセダイイベント

著者に会える、同世代と話せるイベントを毎月開催中！ 行動機会提案サイトの真骨頂です！

ジセダイ総研

若手専門家による、事実に基いた、論点の明確な読み物を。「議論の始点」を供給するシンクタンク設立！

星海社新書試し読み

既刊・新刊を含む、すべての星海社新書が試し読み可能！

マーカー部分をクリックして、「ジセダイ」をチェック!!!

行動せよ!!!